「清猿」考

――嵯峨帝の詩における用例をめぐつて――

菅野禮行

一

我が國の勅撰三集は、九世紀の初頭、わずか十數年の間に、相次いで成立した。『凌雲新集』（以下、凌雲集という。）は、嵯峨天皇の弘仁五年（八一四）、『文華秀麗集』は、弘仁九年（八一八）に、それぞれ成立したというのが今日、通説になつている。[注1]『經國集』は、淳和天皇の天長四年（八二七）の成立である。[注2] 現存本『經國集』は殘闕本ながらも他の二集よりは收載詩數も多く、三集を總べて四百數十首、詩の作者數は百四十人を超える。この中、奈良朝の作者は十數人に過ぎない。[注3] これらの數字は、三集編纂當時の詩壇の盛況を端的に物語つているであろう。そこで、小論では、勅撰三集における語彙的特徴に關する問題を取り上げて考えてみたい。

二

まず、勅撰三集所收の詩には、語彙的な面で極めて特徴的な諸傾向がある。その一つに、猿およびその鳴き聲に關連する語が頻用されていることを指摘することができる。

『凌雲集』に先立つこと六十有餘年に成立していた『懷風藻』（收載詩數、五十六首）[注4]には、その種の語は、寒猨・猿吟（一作叫）の二例しかない。『經國集』に後れること七十有餘年にして成立する『菅家文草』『菅家後集』（收載詩數、計五百十四首）にも猨鳥・猨の二例を見るのみである。[注5] しかるに、勅撰三集には、清猿・哀猿・飢猿・斷猿・曉猿・暮猿・野猿・山猿・老猿・孤猿・連猿・猿叫・猿聲・猿吟・猿啼・猿鳥・猿などの語を延三十餘例の多きにわたつて數えることができる。

菅原道眞の詩に、勅撰三集のこうした詩風の一端が何故に繼承されなかつたかということは、一考を要する問題でもあるが、[注6] 今そのことはしばらく置くことにする。

ところで、先きに掲げた一連の語彙の中、最も頻度の高

いのが、猿と曉猿で各五例。次いで孤猿が三例。次に清猿・暮猿・猿聲・猿啼が各二例となる。この中、清猿は、二例とも嵯峨天皇の御製中に見える。嵯峨天皇は、當時の詩壇のパトロン的な存在であつたばかりでなく、勅撰三集中、それぞれに最も多くの御製を殘すすぐれた詩人でもあつた。その作品中には、清猿・飢猿・曉猿・猿啼など數例の熟語例があるが、中でも清猿の語のみは、『凌雲集』と『文華秀麗集』とに一例ずつの使用例を見る。(注7)

「清猿」なる語は、飢猿、哀猿、斷猿などの語と比較して、一見、語の性質が異なるような印象を受ける。「清猿」とは、一體どのような意味なのであろうか。

三

次に、「清猿」の語を含む嵯峨天皇御製を掲げよう。

歷覽那逢節序悲　　歷覽して那んぞ節序に逢ふことの悲しき

深山忽感宋生詞　　深山忽ち感ず　宋生の詞

半天極嶂煙氣入　　半天極嶂　煙氣入り

暗地幽溪日影遲　　暗地幽溪　日影遲し

聽裏清猿啼古木　　聽裏の清猿　古木に啼き

望前寒雁雜涼颸　　望前の寒雁　涼颸に雜ふ

炎氣盛夏風猶冷　　炎氣盛夏　風猶ほ冷やかなり

況□高秋落照時　　況んや高秋　落照の時

（秋日入深山。『凌雲集』）

第二句の「宋生詞」とは、『楚辭』九辯（王逸曰く、九辯は、楚の大夫宋玉の作る所なり）のことで、とりわけ、

悲哉秋之爲氣也　　悲しい哉　秋の氣たるや

蕭瑟兮　　蕭瑟たり

草木搖落而變衰　　草木搖落して　變衰す

（中略）

皇天平分四時兮　　皇天は四時を平分す

竊獨悲此廩秋　　竊かに獨り此の廩秋を悲しむ

などの詞章をさす。從つて、嵯峨天皇は「秋日に深山に入」つて、高く聳える峰（極嶂）を仰ぎ幽溪を尋ね、「高秋落照」の景を前に、『楚辭』九辯の詞章を想起して、「歷覽して那んぞ節序に逢ふことの悲しき」と歌い出したものである。次に、他の一例を擧げる。

水國追涼到　　水國　涼を追ひて到り

乘舟泛大湖　　舟に乘りて　大湖に泛かぶ

（中六句略）

畏景西山沒　　畏景　西山に沒し

清猿北嶼呼　　清猿　北嶼に呼ぶ

沿洄興不已　　沿洄　興已まざるも

弭棹轉歸艫　　棹を弭めて　轉た艫を歸す

（夏日臨泛大湖。『文華秀靈集』卷上、遊覽。）

小島憲之博士によれば、題中の「大」の字は前田家本に「太」に作る。（日本古典文學大系本、脚注）そこで、同博士は、大湖は琵琶湖を指すが、作者は太湖（江蘇、浙江の二省にまたがる湖水）を連想していたかとし、さらに『類聚國史』によつて、弘仁六年夏四月二十二日の作かと推定しておられる。（同大系、頭注、一〇三ページ）「畏景」は、『春秋左氏傳』の文公七年に、賈季が趙衰と趙盾との二人の人物の優劣を論じて、「趙衰は冬日の日なり。趙盾は夏日の日なり」といつたが、この杜注に「冬日は愛すべく、夏日は畏るべきなり」とあるのに基づく語で、畏日、夏日などと同じ意味のことばである。

ここに掲げた二つの詩は、そこに歌われている、季節や環境が、前者は秋の深山、後者は夏の湖というように、極めて對照的であるが、「清猿」という詩的素材が共に用いられていて、しかもそれが、作品の情緒的な雰圍氣を作り出す上に重要な語となつている點で共通している。

ところで、小島憲之博士は、「畏景西山沒、清猿北嶤呼」の句を、「夏の太陽は西の山に沒し、清らかな聲でなく猿は北の島に相手を呼び合つてなく」と解釋され、さらに「清猿はすがすがしい猿の鳴き聲（唐、王維。瓜園詩『石上聞ニ清猿一』）」と注しておられる。（前掲書、二〇四ページ）

「清猿」なる語は、中國詩にもいくつかの用例があつて、例えば李白の「夢遊天姥吟留別」と題する詩の中に

謝公宿處今尚在　　謝公の宿處　今尚ほ在り
渌水蕩漾清猿啼　　渌水蕩漾として　清猿啼く

とある。この「清猿啼く」を、武部利男氏は、「猿がきよらかな聲でないていた」（中國詩人選集『李白』上、一二二ページ）と解釋しておられる。

また、『大漢和辭典』の「清猿」の項には、任昉の「清猨と壺人と旦を爭ひ、緹幙と素瀨と輝きを交ふ」（齊竟陵文宣王行狀）を引き、さらに張銑の注「清猨とは、猨の鳴く聲清なるを謂ふなり。壺人は刻漏を掌る人なり。夜聲を發して曉を候ふ。山中の猨と刻漏の人と、俱に聲有りて相爭ひて其の曉を候ふがごときを言ふ」（『文選』卷六十所收）を擧げて「きよらかに鳴く猿」と説明する。

猿聲に限らず、物音は、聞き手の主觀に左右されてどのようにでも聞こえる場合がある。がいかにそうであるとはいえ、一方で飢猿、斷猿（斷腸の猿）、哀猿などの語があるのを考え合わせると、猿聲がすがすがしく、清らかな鳴き聲に聞こえる場合があるというのは、いささか奇異な感じ

を受ける。銑注の「清猨者、謂猨鳴聲清也」の「清」の字の解釋も、きよいの意味にとつて果たしてよいであろうか疑問である。

一方、青木正兒博士は、李白の「朝下、過盧郎中敍舊遊」と題する詩の句、

明湖思曉月　　明湖　曉月を思ひ
疊嶂憶清猿　　疊嶂　清猿を憶ふ

における「清猿」に注して、「清とは聲が甲走つて高いこと」（漢詩大系『李白』五八ページ、脚注）と述べておられる。

果たして何れの説に從うべきであろうか。「清猿」の語の意味のほか、その情緒的特質（語感）なども、合わせ考えながら、以下、檢討してみたい。

四

次に、勅撰三集中の詩において、猿聲が明確に形容されていると思われるものの主な例を掲げ、さらに中國詩の例を擧げる。

曉猿悲吟誰斷得　　曉猿の悲吟　誰か斷ち得ん
朝花巧笑豈堪看　　朝花巧はしく笑みて　豈に看るに堪へんや

（嵯峨天皇。和左大將軍藤冬嗣河陽作。『凌雲集』）

曉猿莫作斷腸叫　　曉猿作すこと莫かれ　斷腸の叫びを
四海爲家帝者心　　四海を家と爲す　帝者の心

（小野岑守。奉和江亭曉興詩、應製。『凌雲集』）

黃昏極嶂哀猿叫　　黃昏の極嶂に　哀猿叫び
明發渡頭孤月團　　明發の渡頭に　孤月團かなり

（小野岑守。遠使邊城。『凌雲集』）

此地幽閑人事少　　此の地幽閑　人事少なり
唯餘風動暮猿悲　　唯だ餘かなるは　風動ぎて暮猿悲しきのみ

（嵯峨天皇。春日嵯峨山院、探得遲字。『文華秀麗集』）

傍峯近聽想客唱　　峯に傍ひては近く聽く　樵客の唱
入澗深聞斷猿聲　　澗に入りては深く聞く　斷猿の聲

（藤令緒。早春途中。『經國集』）

鳥影日中掛
猿聲峽裏悲　　鳥影　日中に掛かり
猿聲　峽裏に悲し

（文眞室。奉試詠三。『經國集』）

これらの例をみると、いずれも猿聲は悲哀なるものとして表現されている。そしてそれが、その作品の情緒的性格を方向づけるばかりでなく、抒情性を高揚せしめる重要な語の一つとなつていることが、これらの摘句からでも推察できる。

次に、中國詩の例を掲げる。

はじめに『古詩紀』によつて、猿聲を形容する句の主な例を掲げる。繁を避けて、必要なもの以外は、その語の用例を含んだ一句を示すにとどめ、書き下し文は省略する。

玄猿臨岸歎。（陸機。苦寒行。晉卷四）

猿聲閑且哀。（陶淵明。丙辰歳、八月中於下潠田舍穫。晉卷一五）

巴東三峽猿鳴悲、夜鳴三聲淚沾衣。（清商曲辭。女兒子二曲〈其一〉晉卷一五）

乘月聽哀狖。（謝靈運。入彭蠡湖口。宋卷四）

悲猿響山椒。（謝惠連。泛湖歸、出樓中望月。宋卷五）

嗷嗷夜猿鳴。（沈約。石塘瀨聽猿。梁卷一一）

疊嶂易成響、重以夜猿悲。（任昉。贈郭桐廬出谿口見候、云云。梁卷一五）

峽近猿聲悲。（王泰。賦得巫山高。梁卷二三）

猿哀夜月明。（劉孝勝。武溪深行。梁卷二三）

哀猿數處愁。（江總。別南海賓化侯。陳卷八）

風靜夜猿哀。（李孝貞。巫山高。隋卷三）

以上のように、猿聲は多く悲哀感をもつて歌われる。こうした傾向は、唐詩においても同様である。以下、『全唐詩』（明倫出版社本）中の例の一斑を掲げる。

古戍夜猿哀。（張說。岳州別梁六入朝。卷八八）

愁猿學四禪。（王維。遊悟眞寺。卷一二七）〈一作王縉詩〉

萬古寒猿悲。（李頎。二妃廟送裴侍御使桂陽。卷一三四）

猿狖清夜吟、其聲一何哀。（儲光羲。雜詩二首〈其二〉卷一三六）

其時月黑猿啾啾、微雨霑夜令人愁。（王昌齡。箜篌引。卷一四一）

莫將孤月對猿愁。（王昌齡。盧溪主人。卷一四三）

猿吟一何苦、愁朝復悲夕。（王維。聞裴秀才迪吟詩、因戲贈。卷一二五）

空復一猿哀。（劉長卿。尋白石山眞禪師舊草堂。卷一四八）

猿啼啾啾滿南楚。（劉長卿。湘中憶歸。卷一五一）

日落猿啼欲斷腸。（孟浩然。登萬歳樓。卷一六〇）

哀猿不可聽。（岑參。峨眉東脚、臨江、聽猿、懷二室舊廬。卷一九八）

空山猿獨愁。（徐浩。謁禹廟。卷二一五）

このほか、杜甫、李白、白居易などにおける猿聲にまつわる表現もまた、悲哀感、寂寥感等の情緒的形容語をもつてする傾向が多いように見受けられる。

五

さて、以上に擧げた諸例に見られるように、猿聲が人の悲哀感を誘うのは、本來、猿の鳴く聲そのものが、概して物悲しく聞こえるという普遍的な要素に基づく點があるであろう。しかし、一方では、猿に關する諸種の說話が存在することもまた看過できない。ここでは、猿の悲鳴に關するもののいくつかを揭げる。

實際のところは、悲しげに鳴く猿であるからこそ次のような話が成立するに至ったのかも知れない。しかし、後の時代の人々にとっては、猿聲の悲哀感を、それらの話によって一層定着させる結果になったという側面があるのも、また考え得ることである。

まず、『世說新語』（宋、劉義慶撰）に、

（晉）桓公、蜀に入りて三峽に至る。部伍中に猨子を得たる者有り。其の母、岸に緣りて哀號し、行くこと百餘里なるも去らず。遂に跳りて船に上り、至れば便卽ち絕ゆ。破りて其の腹中を視れば、腸皆寸寸に斷つ。（下略）（卷下之下、黜免第二十八。〈四部備要本〉）

とあり、梁の劉峻注に、次のごとくいう。

荊州記に曰く、峽長七百里、兩岸山を連ね、略絕ゆる處無し。重巖疊嶂として、天を隱し日を蔽ひ、常に高猨長嘯すること有りて、屬引淸遠なり。漁者歌ひて曰く、巴東三峽巫峽長し、猿鳴一聲淚裳を沾す。

また、『藝文類聚』（卷九十五、獸部下、猨）所引の『宜都山川記』にも、

峽中、猨鳴至つて淸にして、諸山谷其の響きを傳へ、泠泠として絕えず。行く者之を歌ひて曰く、巴東三峽猨鳴悲し、猨鳴三聲淚衣を霑す。

と述べる。

また、『水經注』（北魏、酈道元注）にも、

晴初霜旦に至る每に、林寒く澗肅しく、常に高猿の長嘯すること有り。屬引淒異にして、空谷響きを傳へ、哀轉久絕す。故に漁者歌ひて曰く、巴東三峽巫峽長く、猿鳴三聲淚裳を沾す。（卷三十四、江水。〈四部叢刊本〉）

の記述が見える。それぞれに引用された歌が少しずつ異なるのも面白いが、それらはいずれも猿聲の哀調を歌う點では同じである。世說の注に「屬引淸遠」といい、『宜都山川記』に「猿鳴至つて淸」という。これらの「淸」の解釋については、しばらく後にまわしたい。

また、『山海經』（著者不詳。晉、郭璞注）の

堂（一作常）庭の山に棪木多く、白猿多し。（南山經第一。〈四部叢刊本〉）

の下に、郭璞は注して

今の猿は獼猴に似て大、臂脚長く、便捷なり。色は黑きもの有り、黄なるもの有り。鳴くとき其の聲哀し。

という。

これらによると、すでに魏晉の間に、猿聲が悲哀的感覺をもつて、一般に認識されていたことがうかがわれる。

六

さて、以上考察して來たように、猿聲および猿という語は、悲哀的な形容語をもつて表現されることがむしろ普通であつた。

「すがすがしい猿（の鳴き聲）」、或は「清らかに鳴く猿」の意味に理解するのでは、これまでに檢討してきた悲猿のイメージに、はなはだしくそぐわない。

では次に、「清猿」の語、もしくは猿聲が「清」と形容されている唐詩の用例のいくつかを、『全唐詩』中より次に掲げて檢討してみよう。

清猿坐見傷。（李嶠。弩。卷五九）

石上聞清猿。（王維。瓜園詩。卷一二五）

猿鳥〈一作鳴〉備清切。（王昌齡。宴南亭。卷一四一）

別後冷山月、清猿無斷時。（王昌齡。送張四。卷一四三）

愁聽清猿夢裏長。（王昌齡。送魏二。卷一四三）

山月清猿吟。（常建。潭州留別。卷一四四）

清猿古木中。（劉長卿。登思禪寺上方題修竹茂松。卷一四七）

清猿不可聽。（孟浩然。湖中旅泊、寄閻九司戶防。卷一五九）

清猿助客愁。（皇甫曾。送元侍御充使湖南。卷二一〇）

吳歌斷清猿。（李白。書情、贈蔡舍人雄。卷一六九）

洗心向溪月、清耳敬亭猿。（李白。別韋少府。卷一七四）

淥水蕩漾清猿啼。（李白。夢遊天姥吟、留別。卷一七四）

疊嶂憶清猿。（李白。朝下過廬郎中敍舊遊。卷一七九）

淹留惜將晚、復聽清猿哀。清猿斷人腸、遊子思故鄉。（李白。春陪商州裴使君遊石娥溪。卷一七九）

清猿響啾啾。（李白。自巴東、舟行、云云。卷一八一）

月苦清猿哀。（李白。過汪氏別業、二首〈其二〉卷一八二）

悄然坐我天姥下、耳邊已似聞清猿。（杜甫。奉先劉少府新畫山水障歌。卷二一六）

これらの用例のうち、「清猿」を、「すがすがしい（或は、清らかな）猿（の聲）」と解しても意味が通るのもあるけれども、むしろそれよりは、「清猿不可聽」「清猿助客愁」「清猿哀」「清猿斷人腸」のごとく、清猿の聲もやはり、斷腸の思いを時として起こさせる、哀愁を帶びたものとして表現されている例に注意したい。

すなわち、これらの「清猿」の聲は、人間の耳に心地よ

い、清らかですがすがしい音聲としては歌われていない。やはり、青木正兒博士の所説がよいように思えてくる。

しからば、そのように、時として聞くにたえないほどの哀愁に滿ちた鳴き聲を、何故に「清」の字を用いて「清猿」というのか。

この場合における「清」と、「哀」「愁」或は「悲」などとの關係を、いかに考えたらよいであろうか。

次に、章を改めて考えてみたい。

七

「古詩十九首」の中、牽牛・織女を歌った有名な詩に、

河漢清且淺、相去復幾許。（無名氏『文選』卷二九所收。）[注8]

の句がある。この、上の句に見られる「〜且〜」の句法は、『詩經』以來、詩にはしばしば用いられるものである。

そこで、「清且〜」（または「〜且清」）という句型において、音聲を形容すると見られる場合、「清」に對して、「〜」の部分にいかなる語がくるかを檢討してみたい。

資料はやはり、『古詩紀』『全唐詩』を用いることとする。

晉相和兮悲且清。（蔡琰。悲憤詩。二首〈其三〉漢卷四）

管絃發徽音、曲度清且悲。（王粲。公讌詩。魏卷五）

今我作歌詠高風、激揚壯發悲且清。（傅玄。秦女休行。晉卷二）

閑夜撫鳴琴、惠音清且悲。（陸機。擬東城一何高。晉卷五）

簫管清且悲。（潘岳。金谷集作詩。晉卷八）

哀絃理虛堂、要妙清且淒。（何承天。芳樹篇。宋卷一）

簫管清且哀。（王融。遊仙詩、五首。〈其三〉齊卷二）

絲管清且哀。（張說。岳州宴別潭州王熊、二首。〈其一〉全唐詩、卷八七）

杳杳褱褱（一作淒淒。一作依依。）清且切。（常建。嶺猿。全唐詩、卷一四四）

可憐新管清且悲。（岑參。裴將軍宅蘆管歌。全唐詩、卷一九九）

擊節獨長謌、其聲清且悲。（白居易。續古詩十首。〈其二〉全唐詩、卷四二五）

これらの例を見ると、「清且〜」の句法を用いて音聲を形容する場合には、「清且悲（哀）」と歌われることが多いのである。

このことは、「清」と「悲」或は「哀」などに密接な關連があることを示唆している。つまり、「清」の語と「悲（哀）」の語との情緒的感覺は、互に反撥し合うものではなく、むしろ通い合う要素を含有しているのではないか。以上の諸

例に歌われている音聲は、悲哀、哀切の音色をまぎれもなく有していて、何承天の詩句の例のごときは、その哀絃の響きは淒絶でさえある。

故に、音聲の形容語としての「清」は、清らかですがすがしい音色を形容しない場合の方が、より一般的ではなかつたかと思われる。

屈原の「世人皆濁り、我獨り清めり」(漁父辭)にみるまでもなく、我々は、「濁」は汚濁にして忌むべきもの、「清」は、清廉にして好ましいものなどの素朴な印象を抱きがちである。事實、唐詩における「清」には、當然のことながら、

松雨時復滴、寺門清且涼。(崔國輔。宿法華寺。全唐詩、卷一一九)

寒更傳曉箭、清鐘覽衰顏。(王維。冬晚對雪、云云。全唐詩卷一二六)

杜陵賢人清且廉。(李白。題東溪公幽居。全唐詩、卷一八四)

などの用例も見る。統計的に見れば、むしろこのような、清潔、清廉、清澄などといつた用例の方が多いかも知れない。しかし、前述したように、音聲の形容語としての「清」は、悲哀の感情を伴なうものであつた。

從つて、「清猿」の「清」は、「清鏡」「清廉」などの「清」とは意味的に大きな隔たりがある。「清猿」の鳴き聲は、心地よく耳に響くものではなく、悲哀感の漂う、時には悽慘な感じのものとして聞こえているはずなのである。時には、逆に作者の悲哀感を表現する素材として猿聲が用いられる場合もあつたであろう。

いうまでもなく、「清猿」は、猿の鳴き聲そのものの擬聲語ではない。前掲の詩句中、猿聲の擬聲語に「啾啾」という語が再三用いられていたが、他に古い例を擧げれば、『楚辭』に次の句がある。

雷墳墳兮雨冥冥、猨啾啾兮狖夜鳴。(九歌、山鬼。〈『文選』卷三三所收。〉)

この呂延濟注に「啾啾は猨聲なり」という。しかし、「啾啾」という語は、

不聞爺孃喚女聲。但聞燕山胡騎鳴啾啾。(木蘭詩。〈『樂府詩集』卷第二五、横吹曲辭所收。〉)

揚雲霓之晻藹兮、鳴玉鸞之啾啾。(『楚辭』離騷。〈集注に「鸞は鈴の衡に著くる者なり」とある。〉)

服振振以齊玄、管啾啾而並吹。(潘岳、閑居賦。〈『文選』卷一六所收。〉)

などのように、馬の鳴き聲、鈴の音、笛の音などをも形容する場合がある。してみると、「啾啾」は、かん高い音の擬

聲語であろう。

従つて、啾啾たる猿聲も、それらと類似のかん高い調子のものと想像される。(注9) そのような猿聲は、果たしてすがすがしい印象をもつて聞こえたものであろうか。音樂関係の用語で「清濁」というときの「清」とは、どのような音なのであろうか。

次に『禮記』樂記によつて、それを確めた上、猿聲の情緒的性格をさらに検討したい。

八

『禮記』に、

然る後、發するに聲音を以てして、文るに琴瑟を以てし、(略)小大相成し、終始相生じ、倡和清濁、迭に經と相爲る。(樂記第十九〈十三經注疏阮元本〉以下同じ。)(注10)

とあり、これに對して、鄭玄は、

清とは、蕤賓より應鐘に至るを謂ふなり。濁とは、黄鐘より中呂に至るを謂ふ。

と注する。これによると、「清」とは、十二律の中、蕤賓より應鐘に至るまでの高音をいい、「濁」とは、黄鐘より中呂に至るまでの低音を指していることがわかる。してみると、「清猿」の「清」を樂記鄭注によつて解釋すれば、青木博士のいわれるごとく、かん高い音ということになる。また、樂記の別の經文、

宮を君と爲し、商を臣と爲し、角を民と爲し、徵を事と爲し、羽を物と爲す。(同)

には、鄭注に

五者は君・臣・民・事・物なり。凡そ聲濁る者は尊く、清む者は卑し。

とあつて、宮、商、角、徵、羽の五聲(注11)の中、最も低く濁つた聲(宮)を尊卑に配當すれば、最も尊い君に當たり、反對に最も高く清んだ聲(羽)は、卑いものとして物に當たるとしている。なお、樂記の冒頭に近い部分における孔穎達の疏の中に、「聲とは、是れ宮商角徵羽なり。極濁なる者を宮と爲し、極清なるものを羽と爲す」という。低音を基本とすることは、樂記の中の別の經文の鄭注に、

小・大は、高聲・正聲の類を謂ふなり。

とあつて、低音を「正聲」と述べていることからも知られる。ここで、小・大とは、樂器の大きさによる聲の高低をいい、律管などの最も長く大きいもの(注12)の低い聲を鄭玄は、正聲と説いているのである。

これらのことから、かん高い音聲を、尊卑の感覺で位置づけるなら、それは卑しい音聲であるという説明のしかたが、古くから存していたことがうかがえるのである。

ちなみに、五聲の低い方から第二に位置する商聲のことを、「清商」（殊に澄んだ音〈大漢和辭典〉）ともいい、『呂氏春秋』の

目其の明を失はずして白黑の殊を見、耳其の聽を失はずして清濁の聲を聽く。（卷十七、執一。〈四部叢刊本〉）

における高誘注には、

清は商、濁は宮なり。

という。低く濁つた音の方に近い商聲を、清といつているのは、宮商を相對的にみれば、商は清といえるというまでのことであろう。樂記の孔穎達疏に、「五音の次、宮を以て最も濁とす。宮より以下は則ち稍清なり。君臣民事物、亦尊卑有り。故に次を以て之を配す。」（注13）とあるのは、そのことを意味している。『呂氏春秋』本文の「清濁」の説明は、單に聲の高低の識別をいつているのであるから、「清は商」という注もまた首肯できるところである。

さて、樂記には、音聲の高低の説明のしかたに、尊卑の語をもつてしているからといつて、それがそのまま、すべてのかん高い音を卑しいものと聞く感覺があつたということにはなるまい。なぜなら前に例に掲げたように、鈴の音、笛の音なども「啾啾」という語で形容されるからである。それに樂記は、當時としては音階の理解を容易ならしめるために、「君臣民事物」などに配當して説いたとも考えられる。

しかし、猿の場合、多くは幽深な山中で哀鳴する、その獨特な環境と鳴き方の故か、啾啾として鳴く猿は、中國文學では、古くは好ましいものとして歌われない。

さきに掲げた『楚辭』の「猨啾啾兮狖夜鳴」について、王逸注では、

猨猴善く鳴くは、以て讒言に興ふ。（略）猨啾啾は、讒夫口を弄するなり。（『六臣注文選』卷三三所收）

と述べ、呂延濟も劉良も同じ立場をとる。かん高い聲で鳴く猿聲を忌むべきものとして理解する例である。この解釋の根底に、樂記の、音聲に關する尊卑の感覺が直接的に影響しているかどうかはわからない。しかし、王逸はじめ六臣注は、樂記の説を腦裏に全く置かなかつたかというと、それもまた否定的な材料はない。恐らくは無意識的にもせよ、かん高い猿聲について、樂記の所説の漠然たる連想が多少なりとも働いていたのではなかつたかと思われる。宋の朱熹も、『楚辭』の「猨狖群嘯して虎豹嗥ぶ」（招隱士第十五。〈中華書局影印宋刊本『楚辭集註』〉）の句に注して、

「山谷の中、幽深險阻なるは、君子の處る所に非ず」という。

『楚辭』九歌の成立と樂記のそれとの先後關係を、今は明確になし得ない。從つて屈原が「啾啾」たる猿聲を、樂記にいう所のいわゆる卑なるものとして意識的に歌つたかどうかはわからない。しかし、戰國時代の人々にとつて、一般に、深山幽谷は自然美の存する場所ではなかつた。(注14) 朱子がいうように、そこは君子の處るべき所ではなかつたのである。『楚辭』に現れる猿聲を、後の注釋家達が好意的に解釋しないのは、その環境もさることながら、樂記の所說とも一脈相通ずるところがあるように思われる。

猿をまともに取り上げて、それを詩題として歌う作品は、沈約の「石塘瀨に猿を聽く」(『古詩紀』梁卷十一)あたりがその早い時期のものであろうと思われる。その中に、「既に歡びて東嶺に唱ひ、復た佇みて西巖に答ふ」と歌うように、猿聲を讒口に比するような歌いぶりは見えない。しかしながら、前掲の詩句例に見るごとく、猿聲は悲哀感に滿ちたものとしてなお歌われ續けた。そして本節で考察したように、まさしくそれはかん高いものであつた。從つて、第三節に引用した、張銑注「清猨とは、猿の鳴く聲、清なるを謂ふなり」の解釋も、「清猨とは、猿聲の悲しげに、かん高いものをいう」の意にとるのが穩當ではなろうか。また、第五節に引用した、「屬引清遠」「猿鳴至つて清」などの「清」や、これまで問題にしてきた「清猿」の「清」は、悲哀感を有する、かん高い音聲をいうのである。

そうして始めて、前に例に掲げた、『全唐詩』中の詩句例、「清猿不可聽」(孟浩然)、「清猿助客愁」(皇甫曾)、(復聽清猿哀」(李白)、「清猿斷人腸」(同)、「月苦清猿哀」(同)などの用例の解釋に、字義的にも感覺的にも納得がいくのである。

また、冒頭に掲げた嵯峨天皇の詩における「清猿」の用例も、以上のように解釋することによつて、作品に一層の緊張感が漂うのではなかろうか。特に、冒頭に『楚辭』をふまえて歌い出される『凌雲集』所收の「秋日深山に入る」の詩などは、「清猿」をすがすがしい猿と解しては、作者の眞意を遠く離れた理解にとどまつてしまうのではなかろうか。

時代の變遷につれて、語意や語感は不安定に搖れるものである。自然觀の推移に伴ない、例えば、山猿の哀聲を風流視する傾向が生じるものかどうか、(注15) 今は紙數も盡きたので、それは次の課題として考えてみたい。

(和歌山大學教授)

(注1) 小島憲之著『上代日本文學と中國文學』下、一五一一〜

一五一九ページ。
（注2）前掲書、一五二五ページ。
（注3）岡田正之著『日本漢文學史』増補版、一一九ページ。
（注4）小島憲之博士によれば、『萬葉集』にも猿聲は正面切って詠まれていないという。（『古今集以前』一五一ページ。）
（注5）日本古典文學大系本による。
（注6）同時代の『古今和歌集』巻十九には、「猿山の峡に叫ぶ」の題で凡河内躬恒の歌を載せる。（前掲書一五一・一五四ページ参照。）
（注7）岡田正之著『日本漢文學史』増補版、一二二～一二三ページ。
（注8）『玉臺新詠』では枚乗の作、題は雜詩。
（注9）船津富彦稿「中國の詩に現れた猿の聲」（『漢文教室』第二七號）参照。
（注10）訓讀は、全釋漢文大系本『禮記』(中)を参考にした。
（注11）（注13）鄭玄曰はく、宮商角徵羽、雜比するを音と曰ひ、單出するを聲と曰ふ。（『禮記注疏』巻三十七、樂記第十九）
（注12）全釋漢文大系『禮記』(中)、四三五ページに「宮聲の黄鐘は長さが九寸」という。
（注14）小尾郊一著『中國文學に現われた自然と自然觀』序章、参照。
（注15）岡崎義惠博士は、自然の勝趣に風流を感じるようになるのは、菅原道眞あたりからではないかといわれる。（『日本藝術思潮』第二巻の上、七一ページ）

學會彙報

○昭和五十二年度　漢文學會總會
〔漢文教育研究會〕六月二十五日(土)於學習院高等科
一、研究授業　學習院高等科　間嶋潤一氏
二、研究會
第一部　挨拶　學習院　高等科　田中教務課長
教授者説明　質疑應答　討論
第二部　討論會「今後の漢文教育研究會のあり方」
〔研究發表會〕六月二十六日(日)於東京教育大學G三〇七
一、陳子昂の詩について　加藤　敏氏
一、高啓の樂府について　中山　至氏
一、韓愈について―主情性の文學　松本　肇氏
一、清末民國初の文學について　北海道教育大　宮内　保氏
一、白居易の詩における「雪・月・花」について　和歌山大學　菅野禮行氏
〔總會〕司會　高橋委員
一、議長選出　千原勝美氏を選出
一、報告
(1)庶務報告　高橋委員
(2)研究一部報告　横山委員
(3)研究二部報告　横山委員
一、議事
(1)昭和五十一年度決算　中村俊也委員
(2)學會の今後のあり方について
○總會後の委員會で、委員長牛島德次氏より一身上の都合により委員長を辭任したい旨の申出があり、委員會はその申出を了承し、新委員長に水澤利忠氏を選出した。